

「名前のない星」プロジェクト第一回公演『殺意（ストリップショウ）』に対する批評文

松永雄一

今回公演された『殺意（ストリップショウ）』は三好十郎の代表作の一つであり、戦後の日本文学においても特筆すべき作品です。この作品は、戦争の影響を受けた人々の心理や社会状況を鋭く描写しており、物語の中心には、戦争によって人生が変わってしまった人物たちが登場します。彼らの中にある、戦争の経験やその後の社会の変化に対する不満や絶望感を一人の女性ダンサー「緑川美沙」を通して、我々観客は垣間見せして、それが「殺意」としてやおら形を成していく様を、そしてそれがいかに滑稽で普遍的で、醜いものであるかを体験することになります。

まず、この作品を今の日本で公演する意義は非常に高いと感じています。

理由としては、社会背景の類似が挙げられます。

社会的弱者の目線と言えば、主人公の美沙は地方から上京して、住み込みで学校に通いながら劇団に所属し、劇団活動という芸能活動を始めるが、世の中が大東亜戦争に突入し、彼女は慰問活動になり工場勤務へ移り、戦後は夜の街に堕ちていくことになる。これだけを切り取っても、今の社会問題に挙げられる「トー横キッズ」をまず想起させ、その社会的弱者への向き合い方も作中の美沙の無気力な姿を通して考えざるを得ない、また芸能活動としても、配信者のムーブメントも巻き起こって久しい。その中でも過激な配信で集客をかけ、その後にセックスビジネスへ転向する、俗にいう地下アイドルにもその文脈はある。もちろんAV業界は一昔前とは全く違ってクリーンではある。しかし、それ以外の性産業のブラック化や複雑化は問題視されている。国家が長く不況状況であると、性産業が強くなるというのは社会学ではいわれており、今の日本の不況を否応なく感じる。『殺意』の中でも、決して裕福ではない重い空気を登場人物一人一人が背負っており、唯一資本を持っている人物・山田先生は転向者（裏切者）でかつ、倒錯した趣味を持つ人物として描かれ、正常で真っ当な人物は一人として現れない。

今の世界情勢からくる暗く重い空気と現状、また日本周辺も決して平和などではなく、いつ有事が起きても全くおかしくない危険な状態であることは冷静にみれば明らかでもある。

その、泥沼のような状況になる現代日本を感じる国民の一人として、『殺意』という作品は強烈に今と“これから”を見据えたように感じる作品でした。

その作品を一人で演じる、大変なエネルギーのいることだ。大きなことを言えば、時代を、現在過去、そして未来を背負って真っ向から立ち向かわなければならない作品だ。生半可では向き合えないと思っていた。それでも立っていられるのか、期待と不安を胸に抱

きながら開演を待った。

舞台が始まる、田口佳名子演じる「緑川美沙」はゆっくりと歩いてくる。

まず、その眼である。

全てを見据えているような、胸倉をつかむような一種暴力的にも感じるほどに強い“眼”に客席は魅入られる。

日本の演技術の中で視線や眼への言及は多い、一般的にも顔文字の中心は目の形であり、歌舞伎の睨みも日本的だ、例えばインドの伝統舞踊に視線の型だけで9種類あり、こういった“眼”に言及することはアジア的ともいえるが、それだけ我々日本人はその眼を見るだけで多くの情報を受け取ることができる。

今回の田口氏の目はまさに、殺意のオープニングアクトとして素晴らしいと感じて、その後に広がる世界観に胸を躍らせた。開演前の私の気持ちが杞憂であったと一蹴された。その期待に応えるように、力強い美沙が我々の前で自分の過去を語り掛ける。

もちろんストリップショウのダンサーとして、演舞でも妖艶さを魅せてくれる。

演舞についてももう少し記述するなら、俳優・田口佳名子は失礼な承知で言えば、けっして女性的なプロポーションではない。しかし、その演舞には惹きつけるものがあつた。それは何か？

これも、まず眼だった。開幕から我々はその眼に魅入られている、そこに抗いがたい魅力を感じている、その眼が我々を誘っているようにも見えてしまったのだ、男性としてこれはどうしようもなくある種の欲求を禁じえなくなる、そして前述したとおり女性的なプロポーションではないが、それとは違う魅力がある。鍛えられた身体だ。

その健康的でまっすぐ伸びていく脚先が描く流線型を目で追いながら身体を沿って、彼女の眼にまた帰着する。全身で魅力してくるのだ、それが田口佳名子の演舞だった。視点を広げて、演出にピントを合わせると、戯曲をどう取り扱っているのかに思慮を巡らせることがあつた。

作中の中盤、美沙が「アレグロ・ビヴァーチェ」と叫び、音楽とともに俳優は一旦ハケ、その音楽がやがて戦時中のラジオ放送にクロスフェードしていく。

本来の戯曲では、俳優は踊りながらハケ、さらにハケ切らずにそのまま戦時中の苛烈さと異常性を語り始める。

つまり、勢いが否応なく責め立てて俳優と観客の緊張感と距離感をより強くするように書かれている戯曲の構成に、ラジオ放送を挟むことで、あえてその緊張感と没入感に距離をおき、観客側に冷静さを取り戻す時間を入れている。この意図が、私には図りかねたストリップショウを観に行つた客よろしく、私はこの『殺意』という作品と世界、絶望していく異常性の中に没入していけるのかと思つたのが、途中で現実の客席に案内されたのだ。

正直、ここからもう一度この劇空間に緊張感を積み上げていく作業は、俳優には相当な負担ではないかと思つてしまった。

今作を観劇しての総括として、この公演は戦後の社会問題を現代に照らし合わせ、観客に多くの思考を促すものであり、田口佳名子の力強い演技によって観客は物語の世界に深く引き込まれました。演出では賛否のある挑戦的なシーンもあった、作品との距離感という意味ではかなり慎重な演出だったのではとも受けとれる。作品やテーマに対しに冷静に疑問を持ち続けることは演出家にとって大事な要素だと思う。しかし、そこから踏み込む勇氣と挑戦心も、観客としては期待している。

今後の、俳優・田口氏。そして演出の叶氏の活躍に強く期待したい